涼太の顔から血の気が引きました。

「え……っ？　…う…うそでしょ……」

突然の玲香の宣言に、涼太は最初は冗談だと思おうとしました。しかし、これまでの玲香のあまりにも身勝手な言い分や態度から、冗談ではなく本気なのかもしれないと思い直しました。

「こんな誰も来るわけもないところに閉じ込めて、嘘を言うと思う？」

彼女の唇が冷酷な形に歪むのを見た瞬間、涼太は悟りました。これは冗談などではないのだと。

「……それだけは、嫌っ……お願い…やめて！」

一年間、大切に温めてきた想い。美咲とだけ交わすと決めていた、人生で一度きりの大事な瞬間。お互いに二人が「もっと愛が深まってから」と誓い合い、聖域のように守り続けてきた約束。それを、今まで話したこともない、こんな身勝手な相手に無理やり奪われるなど、あってはならないことでした。

「嫌だっ！　玲香さん……やめて！」

涼太は必死に逃げようとしましたが、玲香の大きな両手が、涼太の小さな顔を鷲掴みにしました。

「逃げようとしても無駄よ。逃げられると思ってるの？」

凄まじい力でした。非力な涼太には、彼女の拘束を振り払う術はありません。

「やめて……本当に、大事なキスなんだ……美咲との、約束なんだ……！」

涼太は必死に頼みますが、しかし、玲香の顔がゆっくりと、確実に近づいてきます。

「いいわね、その絶望した顔。もっと見せて」